

はじめに

私が代表理事を務めるいじめ対策NPO「ユース・ガーディアン」には、毎月20〜50件の相談が寄せられている。NPO設立前に受けたものも含めると、これまでの相談件数は合計6000件にもおよぶ。

話を聞いてみると、現代のいじめが以前よりもはるかに陰湿で、解決の難しいものになってきていることを実感する。そして同時に感じるのが、教師の問題解決能力が落ちていくという非常に残念な現実だ。

相談でいちばん多いのは、「子供がいじめに遭っていると先生に相談したのに、理由をつけて対処を先延ばししようとしてくる」「学校には有効な手立てがない」といったものだ。多くの親は、学校に訴えたのに向に解決に向かう気配がないという、切羽詰まった状態で電話をしてくる。

だが、相談を聞いてみると、親がもっと早く「別の行動」を取っていれば、先延ばしされたり話がこじれたりすることもなく、また、われわれに頼ることもなく解決できたのではないか、と感じることも少なくない。

保護者の多くは、現在の学校がブラック職場になってしまっていることや、長時間労働で疲れきった先生の中には、「できれば、いじめなんてなかったことにしたい」と思っている人が相当数いることを知らない。

そのため、少しでも学校を非難するようなことを言ったり、感情的な様子を見せると、学校から「モンスター・ペアレント認定」されてしまうケースが跡を絶たない。「モンペ認定」されると、学校側はあたかも親をクレイマーのように扱い始める。親から対処を求められても、「見ておきます」と答えつつ、実際にはなにもしないという対応を始めるのだ。

以前の学校なら、いじめた側と被害者、両者をうまく橋渡しし、子供が抱えている悩みを時間をかけて解きほぐすことができたかもしれない。しかし、日本の教育現場はそのようなことが望める状況ではなくなってしまっている。

そんな中で、親が取るべき「適切な行動」とはどのようなものか。それは、なにも難しいものではない。それどころか、「こんな単純なことが重要な?」というものが多い。たとえば……

- 学校に、いじめ対策を求める手紙やメールをいきなり送るのはNG。
- いじめの相談を学校とするなら、最初の連絡は電話で、朝10時ごろが良い。
- 先生との話し合いに子供を同席させない。
- 学校が頼りにならないときは、教育委員会も当てにできない。だが、「ある文書」を見たいと言えば、学校や教育委員会が動く可能性が高まる。

本来であれば、いじめ被害に遭っている側がこのようなことを考える必要はないはずだ。親は子供をしっかり見守り、問題があれば先生に相談して、ともに解決に向かえばいい。

だが、そのような牧歌的なことを言っていられないのが今の教育現場といえる。親も「教師の心理」と「職員室の力学」を知らなければ、わが子を守れないのだ。

私は日本で初めていじめ調査を受件した私立探偵でもある。探偵が行う業務は浮気調査や素行調査が多いが、15年ほど前に「子供が同級生にいじめられているようだが、証拠がないので調べてほしい」という相談を受けた。探偵がいじめ問題にかかわるなんて筋違いではないかと思ったが、実際に調査してみると、第三者の手助けがなければ、とても被害者を救うことができないと思われる状況に出くわした。以降、多くのいじめ調査依頼を受けている。

私はいじめに関する依頼の場合、尾行などで調査員が動く際の人件費しか受け取らないことにしていた。相談はもちろん、録音・録画用の機材の貸し出しも無料だ。依頼者が1円も支払うことなく、事態が解決することもあった。

それでも探偵調査だけでは、複雑ないじめの問題に完全には対応しきれないと感じるようになった。ひとりでも多くの子供たちを救いたいと、2014年にユース・ガーディアンを設立した。それ以降は、NPO法人が必要と判断すれば探偵調査も無償で行っている。冒頭の6000件という相談件数は、NPOと探偵事務所を受けた相談の合計だ。うち

約4500件はわれわれの助言で状況が改善された。被害が深刻なために、探偵技術を使って収束に導いたケースも400件に上る。

本書では、そんな探偵としての経験から出てきた「証言者の探し方」や「記録・証拠の取り方」なども詳しく説明している。どうか参考にしてほしい。

いじめは子供の人生を破壊する。そして、本当の意味で子供を守れるのは親だけだ。この本が、わが子をいじめから守りたいと願う保護者にとって強力な武器となれば、私にとってこれ以上の喜びはない。